



大阪公立大学共同出版会

No.42

# NEWSLETTER

ニュースレター

Osaka Municipal Universities Press (OMUP)

## 目 次

・新年のごあいさつ 我慢から飛躍へ	八木 孝司	1
・リレーエッセイ（1）コロナ禍における教科書出版について	大塚 耕司	2
・『日本林業再生のための社会経済的条件の分析とモデル化』が 2020年度 日本土地環境学会奨励賞 受賞		2
・リレーエッセイ（2）教科書の意味と効用	山東 功	3
・自著を語る（34）まちの健康回復に芝生を活かす グラスパーキングの科学	伊藤 幹二・伊藤 操子	4
・自著を語る（35）若狭街道と鞍馬	中村 治	5
・新刊書の紹介		6
・『書籍・教科書等出版相談会』開催される		6
・大阪公立大学共同出版会事務局より／編集後記		6

## 新年のごあいさつ



### 我慢から飛躍へ

OMUP理事長 八木 孝司

新年明けましておめでとうございます。昨年は、年始には思いもよらなかつたコロナ禍に世界が見舞われ、皆様の暮らしも一変したのではないかと想像いたします。OMUP は飲食店でも小売店でもないのに、出版件数が大幅に落ち込み、公的支援を受けざるを得ない事態になりました。国や府から外出自粛が要請され、授業はオンラインとなり、時間的余裕ができたはずですが、連日の COVID-19 感染拡大のニュースを聞いて、大学人・一般人共に本を執筆する心のゆとりがなくなつたことがその原因ではないかと私は推測しています。私自身もオンライン授業の動画を 5 月中に作成し終わったものの、6 月上旬に「コロナ鬱」に罹りました。おかげさまで病院でよく効くお薬を処方していただき、1 ヶ月半ほどで回復いたしましたが、その間、仕事をする意欲を失いました。

さて 2021 年は大阪府立大学と大阪市立大学の最後の年となります。新大学は我々の出版会と同じ名称「大阪公立大学」となります。また、OMUP は創立 20 周年を迎えます。OMUP は、この記念となる年を、「我慢の 1 年」から「飛躍の 1 年」へと変えたいと思います。新しいスタッフが増え、出版案内ちらしを作り直し、出版説明会も昨年末から始めています。これからも OMUP は皆様の高品質な本作りをサポートいたします。皆様のコロナ禍で溜まつた思い、また新年に向けた意気込み等を本の執筆にぶつけていただけたら幸甚です。そして Go to OMUP ! まずはメールでお気軽にご相談ください。

### コロナ禍における教科書出版について

OMUP 常務理事 大塚 耕司

2019年12月に中国湖北省武漢市で発生した新型コロナウイルス（COVID-19）は、2020年に入り中国国外に感染が拡大し、瞬く間に世界に広がりました。各国は渡航制限を次々と開始し、3月11日にWHOがパンデミックを宣言したのちは、欧米を中心に全国封鎖・都市封鎖があちこちで行われました。日本でも4月7日に緊急事態宣言が出され、都市封鎖に近い自粛生活が2か月近く続きました。6月にはある程度落ち着いたものの夏場に第二波が現れ、本稿執筆中の11月下旬には、大きな第三波が襲ってきています。

そのような中、ポストコロナ時代には社会、経済、環境はどのように変化していくのか、といった点に着目した書籍が次々と発表されています。今後の予測が全くつかない状況ですが、識者と呼ばれる方々へのインタビューや、これまでに起きた、社会、経済、環境に関わる大きな事変を根拠として、さまざまな論が展開されています（例えば、ダイアモンド他、2020）。以下にデータ入手が容易ないくつかの事変例を挙げてみます。

まず石油価格の乱高下です。昨年は、1バレル60ドル前後で推移していましたが、今年の2月以降一気に下落し、4月には月平均で20ドルを切りました。このとき、瞬時値ではマイナスの値、つまり石油を売る側がお金を払うという異常事態も起きています。5月から徐々に回復し、8月には40ドルを超えるまで戻しましたが、それ以上値上がりすることはなく、現在でも40ドル前後で推移していて、コロナ前の2/3くらいに留まっています。

環境の観点からは、一連の都市封鎖・全国封鎖は、気候変動対策の壮大な社会実験であったと言えます。ニューヨークタイムズのツイッター（2020）に、2020年6月17日に掲載された図を見ると、世界最大の二酸化炭素排出国である中国のロックダウンによって、2月から3月にかけて排

出削減の第一の谷ができ、前年比8%減となりました。さらに3月に入って世界中にロックダウンが広がると、4月初旬に大きな第二の谷ができて、最大で前年比17%減にまで達しました。つまり、二酸化炭素の大幅な排出削減が実証されたということです。ただしその後、経済活動が再開されると排出削減量は縮小し、6月には4%減程度にまで戻っています。

国際間の人の行き来も極端な事変例といえます。日本の出入国者数だけみてもその異常さがよくわかります。昨年は月間のインバウンドが250万人から300万人、アウトバウンドが150万人から200万人で推移していました。それが、インバウンドは今年2月から、アウトバウンドが3月から激減して、4月には数千人のレベルにまで落ち込みました。8月以降徐々に渡航制限が緩和されつつありますが、ビジネス関係や留学生関係などかなり限定的で、コロナ前に比べてインバウンドが0.5%程度、アウトバウンドが1.5%程度に留まっています、この状況は当分続くと思われます。

以上はほんの一部の事変例にすぎませんが、これだけでも多面的な考察を加えれば、ポストコロナ時代の世界を論説する教科書の題材として十分価値があると思います。ただし、このような事変の考察は時間が経ってしまうと価値がどんどん下がります。タイミングの良い今のうちに出版を考えてみてはいかがでしょう。その際は大阪公立大学出版会にぜひご相談ください。

ダイアモンド他（2020）：「コロナ後の世界」、文春新書1271、文芸春秋、東京

The New York Times Twitter, June 17, 2020: CO2 emission in 2020, <https://twitter.com/nytimes/status/1273303152264196096>



#### 『日本林業再生のための社会経済的条件の分析とモデル化』が 2020年度 日本土地環境学会奨励賞 受賞

弊会より発刊した「日本林業再生のための社会経済的条件の分析とモデル化」小堂朋美著が2020年度日本土地環境学会「奨励賞」を受賞しました。

小堂朋美氏は同書で2019年度日本環境共生学会学会賞「著述賞」を受賞されており、今回は異なる学会において2度目の受賞という快挙となりました。

### 教科書の意味と効用

OMUP 常務理事 山東 功

教育実習の場などで、先輩の教師から指導されることの一つに、「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」というものがある。教科書に記載された内容を追うことだけでも精一杯の新米教師にとっては、その教科書「で」何を教えたらいよいのか、それこそ苦心惨憺の体であろう。しかし、学習者中心へと「学び」のあり方を転換するためには、教科書を金科玉条として捉える見方を変える必要がある。先の言葉も、教師・学習者それぞれの立場を十分に理解させる上から、発せられ続けてきたのであろう。かく言う筆者も、そうした指導を受けた一人である。

そもそも教科書は、網羅的な教材によって形成され、それらを一字一句洩らさず吸収することによって学習が完成する、というような内容となっていることが多い。そうした形態は、戦前の国定読本教科書が顕著なものであった。例えば、国定三期（1918（大正7）年度以降使用）の『尋常小学国語読本 卷二』には、「二十 オクスリ」という次のような教材が掲載されている（対象は尋常小学校一年生にあたる）。

太郎 ノ オカアサン ハ カゼ ヲ ヒイテ ネテ キマス。太郎 ハ イマ、オカアサン ガ オクスリ ヲ ノム トコロ ヘ キテ、「オカアサン、ソノ オクスリ ハ ニガウ ゴザイマス カ。ニガイ ナラ、オサタウ ヲ 入レテ オアガリ ナサイ。」「イイエ。サウ ニガク ハ アリマセン。」「ソレ ナラ、ソンナニ スコシ ヴツ ノマナイデ、モツト タクサン オアガリ ニ ナツタラ、ハヤク ナホリマセウ。」「イイエ。サウ 一ドニ ノンデ ハ イケマセン。オクスリ ハ、オイシヤ サマ ノ オツシヤル トホリ ニ シテ ノマナケレバ、ナリマセン。」（pp.59～62）

母親の飲む薬が苦くないかを気にかけ、風邪が早く治るよう薬を沢山飲むと良いのではと、太郎は考えたのであろう。何と母親想いの子どもだと推賞されそうなものだが、母親は、薬は一度に飲むものではなく、医師の指示に従うことを、病床ながらも太郎に教え諭すのである。うがい薬や消毒薬までも飲みかねなかつた大人に対して、大いに聞かせてやりたい一節である。

戦前の学校教科書は、教師による注入主義的な教育を前提にしていたため、それこそ、ありとあらゆる内容が盛り込まれていた。国語の教科書に薬の飲み方まで記載されているのはこのためである。逆に、このことは、教科書さえ完全に押さえておけば問題無いという安心感を、生徒のみならず教師にも与えることになった。「教科書に書いてある」ということだけで、教師と生徒の両方が満足してしまうという、今日にも繋がっている教科書観は、牧歌的な空間において成立する、一種の信仰に近いものがある。

しかしながら、そうした安逸な幸福感の中では、学習者の主体的な「学び」へと教育内容を展開することが極めて困難なものとなる。このことに対する戒めは、「アクティヴ・ラーニング」といった新用語を使わずとも、先の「教科書で教える」という言葉でも十分に示されているのである。そのように考えると、問題はそうした「教科書」の存在ということになるだろう。学習者主体の教育において、「教科書」はどのような形態であるべきか。これは、初等・中等教育に限らず、知識の伝授という側面がとりわけ重視される高等教育の場においても、極めて重要な問いかけにもなるに違いない。

とりわけ、学習者と教師とが直接対面できないような状況が多く生じるようになった現在、教科書の意味を再認識し、そのあり方を模索することは、今後の教育の方向性を決定する上でも重要であると思われる。それは、新たな意味での教科書の効用を求めることになるだろう。こうした教科書作りに、非営利活動という採算とは別にした出版事業を担う「大学出版会」がどのような役割を果たすのか、これからが問われているようにも思われる。ただし、とりわけ奇怪な情報が蔓延しつつある現在、「お薬は、お医者様のおっしゃる通りにして飲まなければ、いけません。」位は、大学の教科書にも明記しておいた方が良いのかも知れない。



## 自著を語る（34）



### まちの健康回復に芝生の力を活かす グラスパーキングの科学

伊藤幹二・伊藤操子 著

企画：特定非営利活動法人グラスパーキング  
「駐車場芝生化」技術協会

A5判、並製本、158頁 2,200円+税

ISBN978-4-909933-18-8 C3061

著者のグラスパーキング（駐車場芝生化）との関りは、地元兵庫県が「ヒートアイランド対策計画」を策定し、これをもとに2005年に「駐車場の舗装改善・芝生化」の検証実験事業が開始され、出展企業のとりまとめ役として参画したことから端を発します。この事業で得られた貴重な科学・技術的情報は、著者ら有志で立ち上げたNPO法人グラスパーキング（駐車場芝生化）技術協会に現在も保存されています。

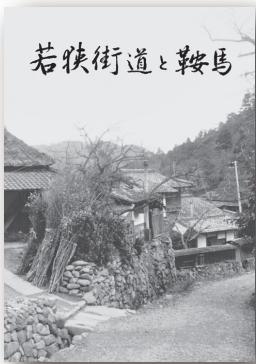
このような流れの中で、本書を著わすことにした直接の動機は、あるとき日本全土にわたりまちとよばれる地域（都市・市街地）の大半が、不透水物にすっぽり覆われている現実に気づき危機感をもったからです。いろいろな地域をグーグル・マップの航空写真でみてみると、愕然とします。確かに、それぞれに使途のある建築物や道路、鉄道等の必要不可欠な不透水施設・平面もありますが、とくにアスファルト・コンクリートで覆う必要のない平面も多いことが分かります。つまり、これは私たちが、どこにでも車を走行・駐車しやすいこと、敷地内平面の清掃や除草の手間が省けることなどの利便性を第一義的に選択した結果、起こっていることなのです。しかし、その便利さと引き換えに、地表面に貯熱・蓄熱性の不透水面を張り巡らせることに起因するまちの暑熱化と水循環異常は、熱中症、内水・外水氾濫、汚染・汚濁物質の拡散などという形で生活者を苦しめています。

本書における提案は、これらの駐車場の芝生化、つまり、不透水性のアスファルト・コンクリート面を可能な限り土壌と植物で構成される被覆、すなわち芝生に置き換えることです。持続性のある健全な芝生による環境保全機能、そして踏圧などの物理的ストレスに対する芝生の耐性は、芝の広範な使途と長年の歴史から見て疑いの余地のないものです。したがって、駐車場を芝生化するという発想自体は正しいはずです。しかし、日本で駐車場の芝生化が試みられてからもう20年以上経過するなかで、残念ながら大半は

芝生の持続化に失敗し、この試みへの不信と疑問が残る結果となっています。持続性のある芝生化駐車場の整備は、本当はそれほど難しいことでも、コストの掛かることでもないにも拘らずです。これまでの失敗は、整備計画者（多くは設置や補助の責任者である公共団体）の‘造っておしまい’の考え方と設計・施工における生物科学・技術（とくに芝草科学）の専門家の不在によるものといえます。

本書は、大きくは前半の「基礎編」（第1章～第8章）と後半の「応用編」（第9章～第15章）に分かれています。「基礎編」では、今日の私たちの生活圏で毎年発生する深刻な豪雨災害や健康被害が、実はまちの表面の大半を舗装で覆ってしまったことにある事実を、背景や関連要因から解説しました。また、駐車場芝生化において主体をなす二者、すなわち舗装駐車場と芝生というものについて、その本質を紹介するとともに、それらの合体となる駐車場芝生化の本当の意義、および‘芝生’を知らないが故に生じた過去の累々たる失敗の社会構造的・科学技術的要因についても言及しました。同じことを繰り返さないためです。本書の半分を「応用編」に割いたのは、前半において駐車場芝生化の重要性に共感してくださり、実際に設置したいと考えられる方々に、雑音に惑わされることなく持続的で望ましい芝生化を行っていただきたいと思ったからです。計画から定着した芝生の長期的維持までに必要な具体的な事柄、さらに全過程の一貫性がいかに重要かを述べたつもりです。

まちの健康回復のために現状の過剰な舗装部分を芝生化することは、気象災害への対策と持続可能な開発目標11（SDGs, No.11）「住み続けられるまちづくりを」の実現に向けて喫緊の課題です。これには地権者・設置者、設計・施工・維持管理等に関わる企業や公共団体から、この環境影響を受ける市民・住民まで多くの直接的な関係者が存在し、実現に向けての協働が求められます。本書がこの課題への参考書としてお役にたてれば幸甚です。



### 若狭街道と鞍馬

中村 治著

編集・制作協力：鞍馬 明目に向かって

A5判、並製本、38頁 600円+税

ISBN978-4-909933-16-4 C1039

今日、「鯖街道」、「若狭街道」と聞くと、国道367号線に沿った道、つまり京都の出町から八瀬、大原、滋賀途中、朽木を経て、若狭の小浜へ通じる道のことを思い浮かべる人が多いでしょう。しかし鞍馬経由の道がそう呼ばれたこともあります。道の整備がすんでおらず、ものの運搬を人力と畜力に頼っていた時代には、どの道が「鯖街道」、「若狭街道」であったのか。その問題にわたしは関心を持ってきました。

わたしは、鞍馬経由の道や大原経由の道を通って運ばれた品物のうち、もっとも重要であった炭と柴に注目し、それらがどこを通ってどのように運ばれたのかを調べました。統計がなかった村もあるので、正確には言えないのですが、『京都府地誌』（1881年頃）の時代でも『京都府愛宕郡村志』（1911年）の時代でも、鞍馬経由の道に沿った村の炭と柴は、大原経由の道に沿った村のそれらの数倍がありました。荷車が少し使われ始めた『京都府愛宕郡村志』（1911年）の時代でもその差に大きな変化がなかったのは、大原—京都間の道がいくつかの箇所において狭く、鞍馬—京都間の道の場合は急坂が多く、京都への運搬が、荷車ではなく、人力と畜力によって行われたからでしょう。

では人力と畜力によって、炭と柴はどのように運ばれていたのでしょうか。鞍馬や大原の人は、徒歩で京都まで日帰りで行けましたが、鞍馬と大原より北の花脊・百井・大見・尾越の人はそれをできませんでした。そこでそれらの村の人は鞍馬、あるいは大原まで炭を人力あるいは畜力で運んで売り、そこで日用品を買って帰るという生活をしていました。その際、炭の運び先は鞍馬であることが多かったのです。鞍馬—京都間は大原—京都間よりも道幅が広く、牛馬がすれ違うことができたので、鞍馬—京都間にある岩倉、松ヶ崎、上賀茂、下鴨、紫竹などの村人が、農業のあい間に自らの牛馬を連れて鞍馬へ行き、炭を牛馬の背に載せて京都まで運んでいて、鞍馬—京都間の流通が確立されていたからでしょう。

では花脊・百井・大見・尾越よりさらに北の村の人はどうしていたのでしょうか。わたしは、琵琶湖に注ぐ安曇川流域にあって、安曇川中流域の梅ノ木と強い関係を持つ久多に注目しました。久多は滋賀県側と強い関係を持ってい

るのに、鞍馬や大原と同じくかつては京都府愛宕郡に属し、今は京都市左京区に属しているのはなぜだろうと思ったのです。それは明治時代中頃まで、久多の人がその主産物である炭を尾越に運んでいたからであるとわたしには思いました。久多から梅ノ木への道（4km弱）は、安曇川支流の久多川・針畠川に沿って下る道ですが、険しい道で牛馬が通れず、梅ノ木から安曇川沿いにさかのぼって大原へ至る道、安曇川沿いに下って朽木、琵琶湖岸へ至る道も整備が進んでいませんでした。他方、久多から尾越への道（約10km）は、海拔842メートルのオグロ坂峠を越えなければなりませんが、牛馬でも通れる道でした。そのため、明治時代中頃の尾越には久多の炭を扱う問屋が3軒あったのです。

では久多から小浜までの間はどうであったのでしょうか。そこは山地であり、人があまり住んでいなかったところです。しかしあるは小浜と京都を結ぶ直線近くに位置しています。人力で運べない物の場合はともかくも、人力で運べるもので、鯖のように、鮮度を気にしながら運ばなければならぬものの場合は、いくら山道でも、人は最短で行けるところを通ったでしょう。そして久多まで来れば、京都まで炭運びに使われたしっかりした道があったのです。この小浜—久多—尾越—鞍馬—京都という道が重要であったことは、久多に15世紀には関所があったこと、徳川家康が、元亀元年（1570）、朝倉攻めをしていた敦賀から退軍する時にこの道を通ったことからも、明らかでしょう。

しかし京都—大原間の道が拡幅され、滋賀途中から花折峠を越えて安曇川沿いに朽木へ至る道が整備された大正時代中頃以降は、大原経由の若狭街道の方が多く使われるようになりました。もっとも、その頃を待たずとも、鉄道の東海道線が明治22年（1889）に全通し、明治29年（1896）に米原—福井間、明治43年（1910）に京都—新舞鶴（後の東舞鶴）間、大正7年（1918）に敦賀—小浜間、大正11年（1922）に新舞鶴—小浜間で鉄道が開通すると、物流が変わり、鞍馬経由の若狭街道を通って鯖が京都まで運ばれることはなくなったのです。

この本を書く時には、現在の常識にとらわれず、かつての道路の整備状況、運搬手段のことを考えて仮説を立て、古者の話を聞き、そして証拠をさがしていくという楽しさを味わえたように思います。

## 新刊書の紹介



### 獣医学の狩人たち2 20世紀の獣医偉人列伝

大竹 修 著

A5判、並製本、388頁  
2,200円+税  
ISBN978-4-909933-15-7 C0023



### OMUPブックレット No.66

### もう一つのソーシャルワーク実践 ー障害分野・災害支援・国際開発のフロンティアからー

東田 全央 著

A5判、並製本、102頁  
800円+税  
ISBN978-4-909933-19-5 C3336



### OMUPブックレット No.65 現代社会を生きるキーワード3

鈴木 利章 編

A5判、並製本、88頁  
800円+税  
ISBN978-4-909933-17-1 C1336



### マーケティングを活用した 港まち再生と観光開発

#### 第2ゴールデンルート瀬戸内「創造的内海」

松本 英之 著

A5判、上製本、152頁  
3,000円+税  
ISBN978-4-909933-20-1 C3063

## 大阪公立大学共同出版会事務局より

大阪公立大学共同出版会は、大阪市立大学および大阪府立大学における教職員と、本出版会の趣旨に賛同する者の自主的な参加によって成り立っているN P O法人です。本会は、研究・教育成果の発表を助成し、また民間出版社が採算上刊行を引き受けないような優良学術図書の刊行頒布の事業を行い、学術の振興および文化の発展に寄与することを目的とし、次のような事業を行っています。

- (1) 会員の教科書および学術研究報告の刊行頒布
  - (2) 会員の学術図書の刊行頒布
  - (3) 会員のデータベース、ソフト等電子出版物の刊行頒布
  - (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業
- 参加を希望される方は、下記事務局へお問い合わせください。

〒599-8531 大阪府堺市中区学園町 1-1

大阪府立大学中百舌鳥キャンパス内

N P O法人大阪公立大学共同出版会（OMUP）事務局

電話：072-251-6533

ファクシミリ：072-254-9539

e-mail : omup@hs.osakafu-u.ac.jp

URL : <http://www.omup.jp/>

入会金：一口一万円（終身会費）

振込先：三菱東京U F J銀行 中もず支店 普通 3976510

## 「書籍・教科書等 出版相談会」開催される

2020年11月26日(木)、12月4日(金)の2回、OMUPによる出版相談会が大阪府立大学B14棟2階会議室で開催されました。今後、大阪市立大学でも開催していきたいと考えています。出版を検討されている皆様は、ぜひこのような出版相談会をご利用ください。

(文責：金井一弘)



## 編集後記

新年あけましておめでとうございます。昨年は新型コロナウィルスの影響で弊会もテレワーク等「新しい生活様式」への対応を余儀なくされました。そのような環境の下、弊会の存在を知りていただく活動を始めることができました。この活動は今後も継続し、書籍出版を希望する方々のために尽力してまいりたいと存じます。今年も何卒よろしくお願ひ申し上げます。 (文責：児玉倫子)